副官と補佐官

山内　詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
副官と補佐官

【Ｎコード】
Ｎ６７１７Ｕ

【作者名】
山内　詠

【あらすじ】
職務を全うするために邪魔な補佐官と直接対決する軍曹だったが……。
とある軍隊に所属する中佐を上官に持つ軍曹と少尉の物語。逃げる男に追う女。逃げる男・二人の副官・上官の苦悩続編。

（前書き）

雰囲気のみの話です。

悪いけどちょっと付き合ってくれと言われ、礼の前払いとして渡されたのは極上の蒸留酒。
前線に近いこの基地ではなかなか手に入らない酒に目がくらんで、特に用事も無かったディーノは二つ返事でそれを引き受けてしまった。内容なんてよく聞きもせずに。
どんなに美味い酒のためでも、断るべきだったと猛烈に今、後悔している。

目の前にいるのは先日着任したヴァル中佐の副官、タリヤ軍曹。
そして隣にいるのは、ヴァル中佐の補佐官であり、ディーノの同期であり、今回の依頼主グスタフ少尉である。

「なぜ副官を差し置いて補佐官のあなたが中佐のお世話をなさってるの！」

「それが仕事だからです」

「私だって仕事です！」

さっきから彼らは堂々巡りの会話を繰り返し続けている。
このやりとりがもう小一時間続いているのだ。いい加減ぐったりする。

グスタフがいてもいなくてもいいと思われそうなディーノを同席させたのにはそれなりの理由がある。
副官であるタリヤは特別な存在だ。
何しろ彼女にやましい意味で指一本でも触れたら問答無用で軍法会

議行きが確定である。
階級からすればグスタフの方が完全に上ではあるが、立場でいくとタリヤの方がそりゃあもう上すぎるのだ。そんな存在と二人っきりで会うなんて危険なことはディーノだってしたくない。
だから今3人は個室にいるとはいえ、密室状態を避けるために部屋のドアは開きっぱなし。ということは、会話の内容は外にだだ漏れってことだ。
ちらちらと顔見知りの奴らが通りざまに同情の視線を寄こすのがわかる。

まあ、姉が3人もいるディーノはぷりぷりしている女は見慣れすぎていて苦にならない。
矛先がこちらに向かないのであれば問題ないとわかっているし。
彼女たちは何が起こっても笑うし怒るのだ。まともに取り合う方が馬鹿らしい。
……それこそグスタフのように。
まともに取り合うからこうして長々と堂々巡り話をする羽目になる。
同じ土俵で争おうなんて、尚且つ論破しようだなんて、無理無理。
さっさと主導権なんて渡してしまえばいいのに。

ガウェイン大佐の補佐官であるディーノは副官リーナ伍長の着任初日にあっさりと補佐官（じぶん）の仕事の半分以上を彼女へと引き継いでしまった。
内容は細々とした雑事がほとんどだけれど、もともとディーノは身の回りの世話にかかわることが全くできない男（軍に入るまでは姉や母にまかせっきり）だったので、逆に有難いくらい。
これに関してはガウェイン大佐からも了解をもらっている。

下手に出て、あなたがいなけりゃ何もできないと示すこと、認めること。そうすればいつだって彼女たちは文句を言いつつもご機嫌だ

った。
彼女たちとの付き合い方は複雑そうに見えてその実とても単純なのに。

そもそもここでなぜ同じヴァル中佐を上官に持つ二人が喧々諤々とやりあっているのか。

補佐官としてグスタフ少尉ほど重宝する男はいない。
何しろ彼はとにかく気が利くのだ。それに頭もいい。
面倒な書類仕事もころころ変更されるスケジュール管理もお手の物。
さらに料理や裁縫まで簡単にこなしてしまう。
気が利くだけでなく、努力家でもある。
自分の能力全てを常に磨いて、上官のために働くことを惜しまない。

ところが完璧すぎる補佐官は、ぶっちゃけ副官からすれば邪魔者以外の何者でもないわけで。

さらにグスタフはヴァル中佐からタリヤ排除令を受けているのである。
そりゃあもう全力でタリヤを中佐に近づけようとしない。それが命令で、仕事。上官の一言は絶対。

しかしタリヤが中佐にしていることもまた仕事である。
しかもこの命令をしているのはヴァル中佐よりも上のこの基地司令官だ。

あー、めんどくせー。

関わりたくない人間からすればその一言に尽きる。
さっさと中佐が腹をくくってくれればそれで済む話だっつーのに。

何しろ2人共、考えていることは一緒なのだ。全てはヴァル中佐のため。
ただ2人は正反対の場所にいる。ただそれだけの違いでこんなに馬鹿馬鹿しいやりとりなんぞしなくてはならなくなっている。
面倒くさいったらねーよ。

ディーノは火花を散らしている2人にばれないように小さくため息を吐いた。
しかしため息なんかを吐いている間に段々話がよからぬ方向に転がっている。

「なんなの少尉、人の邪魔ばっかりして！」

「あなたこそ中佐の業務を邪魔しているじゃありませんか！」

「私のは仕事です！　中佐を癒やして差し上げなくてはならないの！」

「癒やしなら私が十分差し上げてます！」

おいおいおい。
同じ言葉を使ってはいるけれど、お前ら互いの意味全然違うだろ？
グスタフ的にはお茶を入れたり、甘いものが結構好きな中佐好みの菓子を作ったり、マッサージをしたりなんて健全な意味であろうが、タリヤ的にはそりゃーもう口に出すのははばかられる意味なわけで。
一度下士官食堂でやらかした時にがっつり怒られたらしいタリヤは具体的なことを男の前で口に出さなくなった。しかしそれが大いなる誤解を招く。

しかしディーノはこんな喧嘩に口を出すほど愚かではなかったし止

めようと思うほど自分の力を過信していなかった。
火に油注いでいいことなんてない。

「あなた男でしょ！？　十分なんて出来るわけありません！」

「なんですかその理屈は！　馬鹿らしい！」

もはや売り言葉に買い言葉。お互いまともではなくなっている。
ちらっと開きっぱなしのドアを見れば、すでに興味深々とばかりに覗き込んでいる奴が数人いる。
もう手遅れだと判断したディーノはもう隠すことなく大きくため息を吐いた。
……俺は知らん、俺は知らんぞ。

その後”ヴァル中佐男色疑惑、お相手は補佐官？”という噂が基地中を駆け巡ったのは言うまでもない。

（後書き）

タグの「クールな補佐官」、今回はディーノ少尉ですね。
ちなみに彼は姉が３人いるせいでお姉さま系タリヤ軍曹に全く興味が無い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6717u/

副官と補佐官

2011年7月7日18時21分発行